

## 鈴木会頭コラム 高野山で考えたこと

先月、ローカルサミット(HP は下記サイトからどうぞ)というイベントに参加するため、高野山へ一泊で行ってきました。高野山は開闢から今年で 1199 年目。まちとしては人口も漸減する中、この長きにわたって未だに日本の信仰の中心としてその地位は揺るぎません。その理由は何かと考えてみました。

中国から戻った弘法大師 空海が、当時の嵯峨天皇から許しを得て、この地を真言密教の僧の修行の場とした開いたわけですが、もともとの地主神である丹生都比売神社を大切にし、今でも高野山のお寺が順番にその神社のお世話をしていることはあまり知られていないかも知れません。一般には神仏習合と理解されていますが、信仰の形は異なれど、もともとそこにいらした神様に敬意を払って尊重する、そんな姿勢が見てとれます。

また、泊めていただいた高室院という宿坊は、北條五代最後の氏直公が一夜城の秀吉に敗れた後、(氏直公の父で四代の氏政は切腹を命じられますが、)助命され蟄居していたお寺で小田原坊とも呼ばれています。お寺の前が高野山のメインストリートというべき道なのですが、小田原通りという標識が立っていました。氏直公は高野山で暮らしたのは一年ほどで 30 歳の若さで病死します。その養子が秀吉から河内狭山(今の大阪狭山市)の領地をいただき、明治の廃藩置県までそこを治めていたそうです。

また、空海が未だに生きて御座しているとされる奥ノ院へ向かう途中には大名や著名人の墓所が並んでいるのですが、その一角に(少々手入れが必要な様子ですが)立派な北條家の墓所もあります。さらに織田信長や明智光秀の墓もありました。生前は敵味方で戦っていた者共に対しても死後は同じ場所でその霊を慰める。対照的に欧米や中国の歴史を観れば、権力争いの果てには、敵方の血縁を根絶やしにして、その文化も徹底的に破壊尽くしてしまいます。そうではないことに高野山の懐の広さを感じるのです。自分とは異質なものも受け入れて共存を図る。しかし、本質はぶれることがない。それが高野山が幾多の時代の変遷や苦境を乗り越えて 1200 年という時間の長きにわたってその確固たる地位を保ち続けてきた秘訣なのかと。

考えれば日本という国もまさにそうなのかも。海を渡ってきた様々な異文化を単純には拒まず、しかし、鵜呑みにもせず、いったん受け入れ、それまでの文化と合わせて昇華させる。そんな歴史の繰り返しがこの国のユニークかつ魅力的な文化を育んできたとは言えないでしょうか。

異質なものと共存しながらも、本質からぶれることなく筋を通す。高野山からの帰路考えました。まちづくりもまさにそうなのかもと。

ローカルサミットのホームページは下記サイトをご覧ください。

<http://localsummit.jp/>

会頭 鈴木悌介